

Thinking Rugby 2002～2003 復活、飛躍への視点と論点 その2

“第15条タックルの検証”

Let's read and enjoy Laws. 最近のゲームを見て改めてルールに対する感覚に問題があることを痛感しました。選手はレフリーに不満を持ち、観衆も含めてスッキリしないムードが残るのは不幸なことと言わざるをえません。

楽しくあるべきはずの競技が、勝ち負けだけや、技の伴わない力の優劣を争うだけの道具になってしまっている現状改善を考えましょう。

ラグビーの本質とその良さを見誤ることなくプレーすれば、もっと継続し流動的で感動的な楽しい競技になります。ルールはそのようにつくられているからです。ルールに対する偏った身勝手な解釈を捨てて、ルールの意図が達成されるようにプレーすればもっと面白くなることは確かです。

日本のラグビーをもっと面白くしてラグビー人口を増やし、日本代表チームのラグビーがレベルアップして世界のトップクラスに伍するために、第15条は必須の復習課題です。

「ルールを正しく守る」ことの必要性を説いてラグビー改革の後押しをしようと思います。高校・大学・社会人と技能差はあるとしても、根本的にはプレーに大きな差異はありません。遵守されている度合いを独断にて優良可の3段階に判定しました。不可というのは、その条項が理解されていないか、問題にされていない場合です。問題にされていないということは、必要だから規定されているのに、死文化させてしまっていることの原因を考えねばならないということです。

ルールを正しく守るということについて復習しましょう。ルールの守り方に3段階あります。

プレーの内容	評価
<ul style="list-style-type: none"> ・ルールの意図をプレーに生かして目指すものを追求具現する ・競技の本質を弁え、ルールの意図を具現して楽しいラグビー創造につとめている ・常に自覚し実践しているからそれが可能である 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ルールに書かれてあることば通りにプレーする。 ・ルールを記憶し、ルールを守ろうとしている。 ・ルールの意図を理解して守るところまでいっていない。 ・ルール違反のペナルティが多くない(チーム10以下) 	
<ul style="list-style-type: none"> ・改正のことば(尻)だけをとり覚えて記憶してプレーする ・ルールブックを読まないで、見て覚えた方法で、チーム内で言われたことだけ守ってプレーしている ・ルールを十分理解消化しないままに、昨年までのやり方に改正の部分をつけ足しているだけである。 ・十分指導されていないのだから仕方ないことであるが、ルールを守る心がけも十分とは言えず反則が多い。(15以上) 	×

第15条の遵守度に関して、前もってあなたのチームを評定してください。展開継続・スピーディーのレベルアップという課題を追求するに当たって直面する課題の多い15条の「タックル」に、まず焦点をあわせましょう。

定義の理解が前提になります。

定義

ボールキャリアーが、一人または複数の相手プレーヤーに捕まると同時に、地面に倒されたか、ないしはボールが地面に触れた場合に、タックルが成立する。そのボールキャリアーを「タックルされたプレーヤー」と呼び、タックルされたプレーヤーを捕らえた相手プレーヤーのうち地面に倒れたプレーヤーを「タックラー」と呼ぶ。(P128 参照)



ラグビーがボールを持って走ってもよいことになって、最初にできたプレーがタックルです。本来 tackle は cease and stop 捕まえて止める行為です。立ったままでもプレーができなくなれば成立し、そうなればボールを離すことがきまりとなっていました。少しずつ改訂を繰り返し、リーグラグビーにおける地面につくまで徹底的に倒すタックルの影響もあり、変遷を繰り返して今日のルールになりました。

「捕まると同時に」というのは、時間的同時ではなく、同時状態をいうものです。即ち simultaneously (同時に) は捕まったままの状態ということです。タックラーはタックルをする人ではなく、された人に対してタックルをしたプレーヤーということで、過去の動作を表しています。特別の定義をして確認しておく必要があるからです。英語では「呼ぶ」というところは、are known as tacklers となっているのです。

本文に入って1~4の項目は、定義の補充というべきものです。

1 タックル

タックルはフィールドオブプレー内においてのみ起こる。(P138 参照)

・「タックルはフィールドオブプレー内においてのみ起こる」(can only take place in the field-of-play)について

この項は、タックルはインゴールでは起こらないということです。何故こんな項が必要なのでしょう。復習しておいてください。

2 タックルが発生しない場合

ボールキャリアーが相手側にプレーヤーのひとりによって捕らえられ、味方のプレーヤーそのボールキャリアーにバインドする場合、モールが形成されたことになり、タックルが発生したとはみなさない。(P138 参照)

・「タックルが発生しない場合」について

この項が生かされたプレーを見かけません。タックルの確実度に関係なく、タックルされたプレーヤーが自分の下向勢いで倒れてしまっている場合がほとんどです。

突進することは悪いことではありませんが、breaking a tackle か、パスかモール構成への前段階意識のないのは改めねばなりません。1例をあげれば、フラットな位置でパスを受ける場合、突進してきてその勢いそのまま突破をはかるのもフラットの効用の一つですが、意図的にフラットの位置で止まってパスを受け、相手に捕まって、味方のバインドによってモールを形成し、次の展開へつないでいくというのも、有効なプレーです。

3 「地面に倒される」ということの定義

(a) ボールキャリアーの片膝または両膝が地面につけば、そのプレーヤーは「地面にたおされた」とみなす。(P139 参照)

・「片膝または両膝」について

この項は、両膝は問題なくタックル成立としても、プレーヤーのプレー続行の意思によって、片膝でのプレーが十分可能であるから、one knee or both knees と明確にしたものです。片膝では成立しないとする意見があったから明確にしたわけで、片膝だけの場合もタックルされたプレーヤーになるわけですが、タックルされたプレーヤーとしていろいろなプレーができるわけです。

片膝が着けば地面に倒れなければならないと思っているプレーヤーがいるようです。

3 「地面に倒される」ということの定義

- (b) ボールキャリアーが地面に腰を下すか、地上に横たわっているプレーヤーの上に倒れていれば、そのプレーヤーは「地面に倒された」ものとみなす。(P139 参照)

・「プレーヤーの上に」について

この項は、直接地面についていなくても、タックルが成立することをいっています。

倒れそうになったら重なって倒れる場合がほとんどですから、この項が問題になるところですが、ごちゃごちゃとなってしまって問題なく終わっています。

4 ボールキャリアーが相手により持ち上げられた場合

- ボールキャリアーが相手側によって地面から持ち上げられても、タックルではないのでプレーをそのまま続ける。(P139 参照)

・「地面から持ち上げられても」について

この条項は、プレーヤーが立ってプレーしようとしたことから発生することで、地上に倒れることをそれほど悪いことと思っていない場合には無縁の問題ということになってしまいます。タックルではないのですからプレーは続けられます。

さあ、ここからです。細かく注意しましょう。

5 項のタックラーについては定義がありました。思い出してください。

5 タックラー

- (a) プレーヤーが相手側プレーヤーをタックルして双方が地面に倒れたとき、タックラーは直ちにタックルされたプレーヤーを離さなければならない。(P139 参照)

・「タックラーは直ちに(immediately) タックルされたプレーヤーを離さなければならない」について

相手に先に動かせることによって不利にならないようにと真剣に考えているので、相手を確認してから放すのが普通になっています。

評定：不可

リーグラグビーで倒してから地面に押さえつけるようなタックルが見られましたが、ルールが違います。

5 タックラー

- (b) さらにタックラーは直ちに立ち上がるか、タックルされたプレーヤーとボールから離れなければならない。(P139 参照)

・「直ちに(immediately) 立ち上がるかタックルされたプレーヤーとボールからはなれなければならない」について

(a)項で相手を直ちに放さないのだから立ち上がるのも離れるのも遅くなるのも当然です。

評定：不可

5 タックラー

- (c) タックラーはボールをプレーする前に立ち上がらなければならない。(P139 参照)

・「ボールをプレーする前に立ち上がらなければならない」について

(a)(b)項に加えて、寝たままプレーしてはいけないということですが、(a)(b)項と同様です。

評定：不可

直ちに立ち上がってプレーしようしないのは、日本のプレーヤーの共通の欠点と言わざるを得ません。マッコミックは立ち上がるのが早いプレーヤーでした。

6 項のタックルされたプレーヤーの定義がありました。復唱しましょう。

6 タックルされたプレーヤー

(a) タックルされたプレーヤーはプレーの継続のため、直ちにボールをプレーできるようにしなければならない。(P140 参照)

・「タックルされたプレーヤーはプレー継続のため、直ちに(immediately) ボールをプレーできるようにしなければならない」

評定：不可

これは重要な競技の大基本です。この項は第7条競技方法に入れられるべき内容です。「プレー継続のため」so that play can continue と目標が特にあげられているのです。残念ながら、殆どのプレーヤーはこのように考えていません。「味方が不利ならないように」全力を尽くすのです。多くのプレーヤーが未だに、相手に背を向けてゴールラインに並行に横たわり、背を屈め腕でボールを被うようにすることが、一番よいと考えています。ルールブックを読んでいないし、そのように教えられているのだから当然なことと言わざるをえません。

6 タックルされたプレーヤー

(b) タックルされたプレーヤーは直ちにボールをパスするか、ボールを手放さなければならない。さらにそのプレーヤーは直ちに立ちあがるか、ボールから離れなければならない。(P140 参照)

・「タックルされたプレーヤーは直ちに(immediately) ボールをパスするか、ボールを手放さなければならない」について

評定：可

・「さらに(この言葉は英文にない) そのプレーヤーは直ちに at once 立ちあがるかボールから離れなければならない」について

評定：不可

パスはたまにみられるようになりましたが、チャンスはまだあります。

「直ちに」というところが、immediately と at once の2つ使い分けられています。

immediately は without intervening medium で媒体が介在しないことであり、一方 at once は without delay, at the same time で地滞なく、同時にということです。

immediately も at once も生活感性をもとにして使われるもので、時間の長さは、問題の内容に係わりその時の習慣と感性によって定着し通常につかわれています。基準になるのは一息 one breath と瞬き即ち一瞬があります。地球の公転・自転の時間をもとにしたものが、時分で1分の60分の1、即ち1秒も短い時間の単位としては重要なものです。モールではさらに永い単位として5秒が導入されました。ラグビーでは本来は、moderate, reasonable といった言葉で処理されてきましたが、最近では時間的に明確に決めることによって解決しようという風潮です。

(b)項の前半については最近少し改善されたプレーがみられるようになりましたが、すぐ後ろに味方がサポートしているのに、ボールを持ったまま地上に横たわってしまうことが多いのは残念です。味方に気が付かなかったのかというのではなく、殆どの場合、パスすることを考えて居なかったということです。ルールブックを読んでいないし、パスするように教えられていないし、練習していないから当然なことです。パスをする習慣がつけば、それをサポートする習慣がつくというおおきなメリットがあるのです。

タックラーとタックルされたプレーヤーの関係を整理しましょう。

手離さないと言われるからボールを離れたといっても、抱え込むようにされたらボールを離せません。直ちに立ち上がろうとしても上から乗ってきますので、立ち上がれませんし、ボールからロールアウェイして離れることもできません。

もっとも重要なことは、ルールの意思即ちプレーの継続することです。(a)の方法の指定無しにボールがプレーできるようにということは、継続という結果がなかったら駄目ということで、結果判定が第一です。そこで原因が問題になり、笛がふかれ、原因に対し判定があり、罰か科せられるのです。ここで大切なことは結果の判定と処置にとどまらず、結果が重ねて起こらないことが第一です。プレーヤーも、ラック・モールを前進失敗プレーとして復習するとか、コンタクトの方法その他について復習して向上をはからねばなりません。プレーヤーはレフリーの志向するところを心から理解することが、プレーヤーがルールを正しく守る基本姿勢です。

6 タックルされたプレーヤー

(c) タックルされたプレーヤーはボールをいずれかの方向に置くことによってボールを手放すことができる。ただし動作は直ちに行わなければならない。(P140 参照)

・「タックルされたプレーヤーはボールをいずれかの方向に置くことによってボールを手離すことができる。ただし動作は直ちに(immediately) おこなわなければならない」について
評価：可

「ボールを置くことによってボールを手離すことができる」と言うのは意味がピンときませんが、タックルされた瞬間のボールの持ち様はいろいろですが、タックルされたらただボールを手から離すだけでなく、置ければ地上に腕を伸ばしておくことです。そうすれば横たわった身体から腕の長さ分 30~40cm 離れたところにおかれることになり、プレーの継続が容易になり、スピーディーになります。いずれかの方向に置くということは、タックルされたプレーヤーの相手側もあるということです。双方のサポートの状況によって、相手側に置いたり、頭の先に手を伸ばして置いた方が有利・有効な場合が多いのに殆どみられません。有効なサポートが少ないのと、そんな置き方を考えていなかったというのが理由のようです。

6 タックルされたプレーヤー

(d) タックルされたプレーヤーは地面上でいずれかの方向にボールを押し進めること(前方ではなく)によってボールを手放すことができる。ただし動作は直ちに行わなければならない。(P140 参照)

・「タックルされたプレーヤーは地面上でいずれかの方向にボールを押し進めること(前方ではなく)によってボールを手放すことができる。ただし動作は直ちに(immediately)行わなければならない」について
評価：可

「ボールを押しすすめることによってボールを手離すことができる」というのは意味がピンときませんが、地上に置く時にボールを押し動かしてもよいというのです。寝ながらプレーすることになりラグビーの基本観念に反することですが、敢えてそうすることによって、プレーの継続を促進しようとするものです。横たわっている身体から 20~30cm あるいはそれ以上の間隔が確保されることによって、プレーの継続が容易になることを意図するものです。

6 タックルされたプレーヤー

(e) 立っている相手プレーヤーがボールをプレーしようとする場合、タックルされたプレーヤーはボールを放さなければならない。(P140 参照)

・「立っている相手プレーヤーがボールをプレーしようとする場合、タックルされたプレーヤーはボールを放さなければならない」について
評価：不可

立っている相手プレーヤーが対象です。タックルされたプレーヤーの上に倒れ込んでいくプレーヤーがほとんどですが、たまに立ったままでボールをとろうとするプレーヤーがいると、放しては大変なことになるとボールをしっかり抱き抱えているプレーヤーがいます。

6 タックルされたプレーヤー

(f) タックルされたプレーヤーが惰性でインゴールに入れば、そのプレーヤーはトライまたはタッチダウンをすることができる。(P140 参照)

・「タックルされたプレーヤーが惰性でインゴールに入れば、そのプレーヤーはトライまたはタッチダウンをすることができる」について
評価：良 or 優

player's momentum carries the player into the in-goal. 惰性即ちはずみのついた勢いでプレーヤーが運んだということです。

6 タックルされたプレーヤー

(g) プレーヤーがゴールライン付近でタックルされた場合、これらのプレーヤーは直ちに手を伸ばしボールをゴールライン上またはゴールラインを超えてグラウンディングし、トライまたはタッチダウンをすることができる。(P140 参照)

・「プレーヤーがゴールライン付近でタックルされた場合、これらのプレーヤーは直ちに (immediately)手を伸ばしゴールライン上またはゴールラインを越えてグランディングしたりまたはタッチダウンをすることができる」について

評定：良 or 優

この項は問題なく守られています。

6 タックルされたプレーヤー

(h) タックルされたプレーヤーは、故意にボールをタッチに置いてはならない。タックルされたプレーヤーは、故意にボールを押し出してはならない。(P141 参照)

・「タックルされたプレーヤーは、故意にボールをタッチに置いてはならない。タックルされたプレーヤーは、故意にボールをタッチに押し出してはならない」について

評定：良

voluntarily 故意には、自発的に、自由意志でといういみの言葉です。社会的によく言われているボランティア volunteer 有志者ということです。故意にゲームを切るとは非常にいけないことなのです。タッチでないとは言うまでもありません。この項に関しての反則はほとんどありませんが、これ以外でゲームを切ってしまうことがおおすぎます。

タックラーとタックルされたプレーヤーの項は以上です。一旦総括をしておきましょう。

まず、この文章をここまでお読みいただきました。重ねてであれ、初めてであれ、ルールを読む機会になったことに意義があり、チームの現状を振り返る機会になれば幸いです。

評定は低いレベルのものになりました。率直に言えばこうなります。安易な現状肯定は避けねばなりません。W杯でのゲームとその後のエキジビションゲームとは全く同じでないということは承知しています。W杯では勝負にこだわるところが無いとはいえません。しかし、本質を掴んだ、元のものがあるかないかの違いは大きいものです。

日本は以前、negative rugby からメジャーに勝ったと言われました。ゲームが free or fluid になったら動かない(動けない)と言われてきました。W杯サモア戦では、日本にないプレーで負けました。これらの原因は一連のもので、結論的には、プレー展開継続のレベルの低いことです。改善しなければならないことが山積みです。ルールをあまり読まれていない理由として、ルールブックの表現が複雑で理解しにくいところがあり、読みづらいということもあるでしょう。一方指導者も試合に勝てばよいということだけで、教えるにあたってのポリシーを堅持しているということも必須要件です。

参考図書

平成 14 年度競技規則

財団法人日本ラグビーフットボール協会

2003.03.16

西川 義行